

Ⅱ特別連載Ⅱ

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

福岡工業大学の活動報告



大谷 哲也
(福岡工業大学
学術支援機構
国際連携室)

デリーの高校生招へい

インドと福岡を繋ぐ理系人材育成

福岡工業大学は2023年11月、インド・デリーで開催された福岡県とデリー準州の友好提携15周年記念式典において、デリー準州教育委員会(DBSE)と友好協定を提携しました。この協定は、DBSEが管轄する高等学校の優秀な生徒達が本学との取り組みを通して学び、インドと日本を繋ぐ理系人材を育成することを目的としており、この度2025年11月9日〜15日の約一週間、科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」の支援を得て、福岡県にデリーからの高校生7名を招へいしました。

今回の研修の目的は、①インドの未来を支える理系高校生が、現在インドで起きている環境問題の解決に繋がるヒントを本学でのワークショップなどを通して得ること②県内高校生との交流を通して、異文化理解や自己成長を促進すること③本研修を通じて、インド人高校生にさらに日本への興味と深い理解を持ってもらい、福岡県への進学のきっかけと

してもらおうこと——です。

【2日目】本研修には環境問題に関心を持つインド人高校生が選抜されており、本学の社会環境学科に所属する学生とともに環境フィールドワークとして大学近郊でのビーチクリーニングを実施しました。インドではゴミを捨てる清掃活動をしたことがなく、この活動を通して住んでいる地域をきれいに保つというコンセプトを学びました。また、活動に協力した環境学生組織である「EcoFIT」の学生たちは、インドの高校生との交流を通してインドが抱えるさまざまな環境問題について実情を知ることができました。

【3日目】デリーで問題となっている大気汚染を踏まえ、北九州市にある環境ミュージアムを訪れました。北九州の公害・環境汚染の克服の歴史、工業地帯であると同時に環境を守る取組を学ぶ事により、自国の環境問題の



ビーチクリーニング



環境ミュージアムで係員から説明を聞く招へい者



福岡県立戸畑高校で剣道体験



ビーチで収集したゴミを再利用して作品づくり



「さくらサイエンスプログラム」を無事に修了。後列左端は著者の大谷哲也氏

【5日目】日本文化体験として、福岡県北九州市にある同県で唯一天守閣を持つ歴史的小倉城を訪問しました。また、同じくインドと交流実績のある小倉高校を訪問し、生徒代表による学校説明や授業参加、そしてエコバッグ作成など生徒たち主導による協働ワークショップを行いました。さらに校内清掃の時間にはインドの高校生も参加し、デリーの学校にはない「掃除時間」を体験しました。この体験を通して、自分たちの校舎は自分

【4日目】2日目に収集した多様なゴミを使って福岡工業大学モノづくりセンターで再利用ワークショップを行いました。「資源を再利用する」という概念を学びました。インドでは図工工作の授業自体がなく、高校生たちにとってはこの体験自体が新鮮かつ斬新であり、今後ゴミは新たに資源として活用できる可能性がある、という深い学びとなりました。

解決への糸口を見つける体験となりました。熱心にメモや写真を撮っていた高校生たちは、帰国後に活かせる知識として北九州市の好事例が大変参考になった様子でした。午後にはインドの高校と交流実績がある戸畑高校を訪問し、さまざまな部活動(弓道・剣道・書道・茶道・応援団演舞など)を体験しました。日本の規律ある高校生生活やおもてなしのすばらしさを体験し、「言葉では表すことができない」感動を胸いっぱいに取りつた様子でした。

たちできれいにする、という日本ではごく普通の取り組みを学びました。【6日目】最終日の成果発表会では、まず来日前の課題として与えていた「デリーの大気汚染」について日本語で発表しました。選抜された招へい者の日本語能力は非常に高く、高度な専門用語を使いデリーの現状として大気汚染の問題点や現在進行中の対策を分かりやすく説明しました。また発表後には、本研修での学びと体験を通して、自国の環境問題に対しての自分たちの考え方が来日前からどのように変化したかということ共有しました。成果発表会に参加した日本人学生は、高校生たちの日本語そして英語能力の高さに加え、プレゼンテーション能力の高さにも改めて感銘をうけ、多くの刺激を受けたようでした。

■ 今後の展望

帰国後、さっそく本学への進学を検討しているというデリーの生徒たちが複数いるとの連絡を受け、今後も福岡への進学をサポートしていく予定です。今後の展望としては、デリーの高校生短期受入れ事業を継続し、デリーからの正規学部留学生を受入れ、福岡工業大学キャンパス内の国際化および多様性に寄与し、成長著しいインドと福岡を繋ぐグローバルな人材を輩出できるよう取り組んでまいります。